明治宮殿御車寄受附之間における内観に関する研究

ー 2つのアンビルド案と実施案の比較ー

Keywords
明治宮殿　片山東熊　J.D.Heymann
室内装飾　近代化　マントルピース

K10088　　平井　志織

1. 研究背景と目的

明治維新をきっかけとして、日本の建築は国威を示すために西欧式の建物が求められるようになった。そのような近代化が推進されている中、明治6年(1873)に宮殿炎上が起こり、明治宮殿の計画が本格的に始まる。

明治宮殿は、明治17年(1884)に起工し、明治21年(1888)に竣工を迎えた我国の近代化を象徴する極めて重要な建築物であった。近代化推進派の政府側と伝統を保持している宮内省や内廷などの保守派との様々な紆余曲折を経て、明治宮殿は外観は京都御所を模範とした和風建築であるが、内部は近代国家としての機能を果たすために立礼と椅子という様式の形式を備えて設立した。また、海外の賓客を迎えるためにも洋風の宮殿の設えを用いた和洋折衷の建築であった。

しかし、昭和20年5月25日の空襲の飛び火を受け、この歴史的にも重要な建築は焼失してしまう。

本研究では、明治宮殿造営の装飾と家具などの調度品に関する事業に着目し、後の宮廷建築家となる片山東熊と装飾家のJ.D.Heymannの動向を資料と片山家文書から考察し、明治宮殿の室内装飾における設計手法を明らかにし、その2人が関わったとされる御車寄受附之間の内観の計画案と実施案を比較し、内部の設計経緯と背景を明らかにすることを目的とする。また、室内装飾のなかでもマントルピースに重点を置き、位置や役割を分析し、皇居造営の装飾事業が、建築分野での近代化の象徴である洋風の設えの扱い方にどのような影響を与えたのかを明らかにする。

2. 研究方法

(1)宮内庁書陵部に保管されている『皇居造営録』、『皇居造営誌』を読み解き、J.D.Heymannの設計経緯を明らかにし、木子文庫所蔵の図面資料よりどのような設計変更があったかを明らかにする。

(2)(1)の結果と合わせ、木子文庫所蔵の図面資料より、明治宮殿の設計変更の経緯を明らかにする。

(3) 木子文庫所蔵の図面と平成22年度の研究で発見された片山家資料内の図面より、計画案を明らかにし、立ち上げて比較する。

(4)明治宮殿のマントルピースの位置と近代和風建築におけるマントルピースの位置を分析し、マントルピースの扱い、それに伴う鏡の設え方や上足・下足の仕様が皇居造営によってどのように変化したか考察する。

(5)(1)～(4)の結果より、計画案と実施案との違いを明確にし、設計変更の背景や目的を明確にする。そして、日本の近代化において明治宮殿が果たした役割を明確にする。

3. 片山東熊について

図 1　片山東熊

片山東熊は、嘉永6年12月20日(1854年1月18日)に長州藩で誕生する。慶応元年(1865)には高杉晋作の結成した奇兵隊に入隊し、慶応4年(1868)の戊辰戦争では、山縣有朋の率いる討伐軍に加わり奮戦した。

明治5年(1872)に起きた山城屋事件において、片山東熊の兄の湯浅則和と小林安足が当時陸軍幹部であった山縣有朋をかばい、山縣を救った。この事がきっかけとなり、東熊に対して庇護を加え、彼が宮廷建築家としての地位を得る要因を与えたのであった。その後、明治6年(1873)に工学寮(現東京大学・工学部)に入学し、専門科で造家学を専攻する。

明治12年(1879)に辰野金吾、曾禰達三、佐立七次郎と共に工部大学校を卒業し、同年に3人の卒業生と共に工部省に入省し、営繕局七等技手となり、建築家のスタートを切る。明治15年(1882)に有栖川宮邸建築掛として欧州各国をまわり、各国宮殿を偵察して宮殿の室内装飾の調達を行う。この偵察をきっかけとして、その後皇居造営に出仕し、宮殿の室内装飾を担当した。片山東熊は生涯を明治宮廷と政府関係の仕事にささげたとされる人物である。

4. 調査について

(1)第一回調査2013年7月25日、31日
宮内庁書陵部にて、皇居造営録及び皇居造営誌の写真撮影
撮影したものを表1に示す。

研究指導：伊藤洋子 教授

Shiori HIRAI

表1　書陵部にて撮影した造営録・造営誌

皇居御造営誌80　家具装置事業　1～3
皇居造営録(片山技師独逸出張装飾品購買諸件)　1～3
皇居御造営誌83　電気灯電話線電信線避雷針設置事業
皇居御造営誌84　ランプ装設事業
皇居御造営誌85　瑠璃鏡および各所窓用玻璃購買事業
皇居御造営誌14　職員進退並賞典
皇居御造営誌37　饗宴所事業
皇居御造営誌38　後席之間事業
皇居御造営誌39　東溜之間事業
皇居御造営誌40　西溜之間事業
皇居御造営誌41　謁見所事業
皇居御造営誌42　東化粧之間事業
皇居御造営誌43　女官面謁所事業
皇居御造営誌44　内謁見所事業
皇居御造営誌45　東脱帽所事業
皇居御造営誌46　西脱帽所事業
皇居御造営誌47　御車寄事業
皇居御造営誌48　東御車寄事業

(2)第二回調査2013年9月4日
木子文庫の明治宮殿の図面資料収集

(3)第三回調査2013年11月上旬
造営録、造営誌の分析及び木子文庫の図面分析
近代和風建築の事例収集

(4)第四回調査2013年11月21日
木子文庫の明治宮殿御車寄図面収集

5. 資料の分析

5.1　J.D.Heymannの設計手法

皇居造営誌より、Heymannは明治宮殿の装飾事業において下記の2点の問題点を挙げていることが判明した。

「夥多ノ引戸設置ノタメ装飾品配置ニ適スル壁僅少ナルコト」

「各御室面積ノ割合ニ其高サ低キコト」

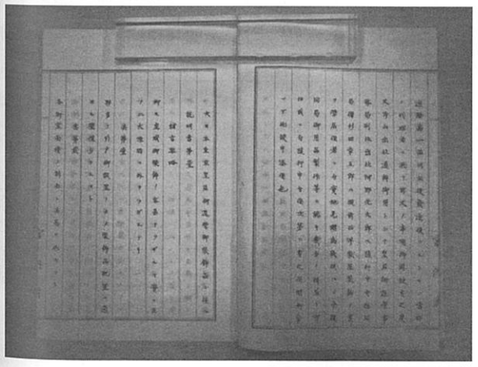

図 2　皇居造営誌　家具装置事業1

この2点の指摘をもとに、木子文庫所蔵の図面を分析すると、建具が引戸から開き戸になっている点や、開口部であった部分が壁面になっているなどの変更点が見られた。これはより、洋風宮殿の設えに近づけ、またHeymannの指示にあるように装飾品を置くためであると考えられる。また、Heymannが高い天井高を求めた理由としては、壁面につける巨大な玻璃鏡や、その玻璃鏡を用いたマントルピースの装飾、シャンデリアなどの吊ランプなどを用いて装飾し、洋装の空間を演出するためであった。

また、Heymannの室内装飾の特徴として室内空間の変更を簡易にできるよう考慮している点があげることができる。造営誌には『専売特許ノモノニシテ畳ムコトノ得可キモノ拾三』、『何レノ向キヘモ甚ダ能ク適當セル軽便家具夥多アリ殊二椅子及卓子ハ之ヲ「フラインク」家具と名ヅケ極メテ容易ニ移動スルヲ得ルモノナリ』という記載があり、家具などの装飾品を動かしやすいものにする配慮がなされていたことがわかる。これは、さまざまな用途に応じて室内空間を変化できるようにしたと考えられる。さらに、京都御所の基となった書院造の特徴である「設(しつら)えて」空間を作るという特徴に対する配慮であると考えられる。

5.2　計画案の分析

木子文庫より御車寄受附之間の図面が確認できた。この図面には明治18年10月と記載されており、これは片山家資料内で発見された図面より以前の計画案であることが分かった。また、片山家資料内で発見された図面と実際の写真を比較するといくつか変更点が見られる。

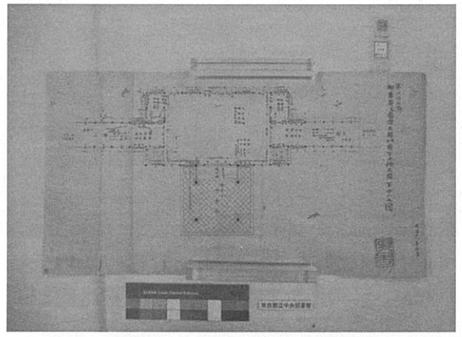

図 3　木子文庫所蔵の図面

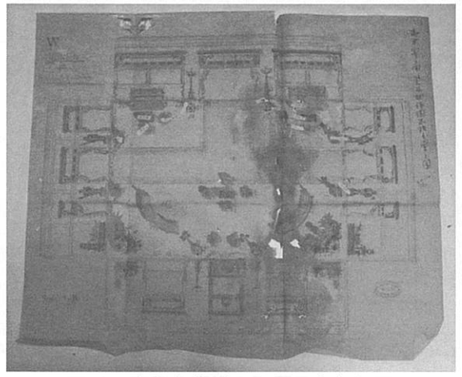

図 4　片山家資料内で発見された図面

図面の2つの計画案を、3D復元した。そして実際の写真と比較し、分析した。なお、木子文庫を残した木子清敬は明治宮殿造営において宮内省技師として活躍した建築家である。

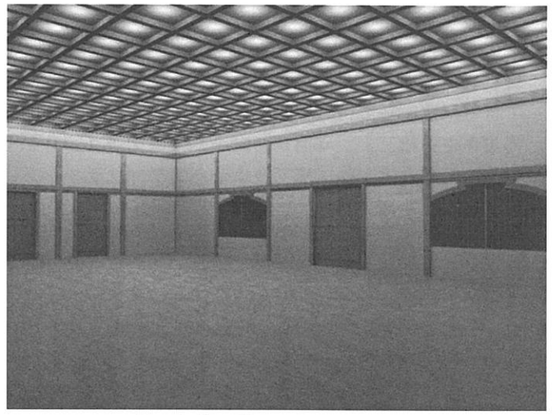

図 5　木子文庫所蔵図面より3D復元した内観

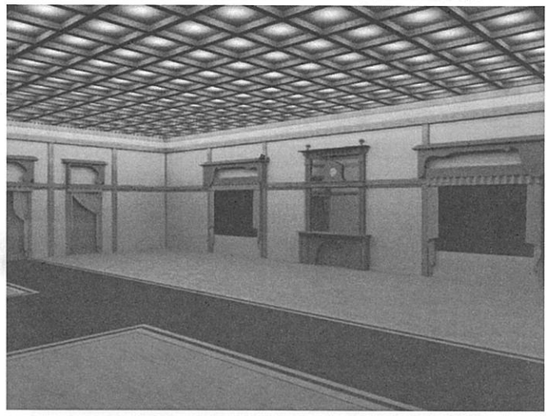

図 6　片山家資料内で発見された図面より3D復元した内観
（この図面では巾木の有無が明確ではない）

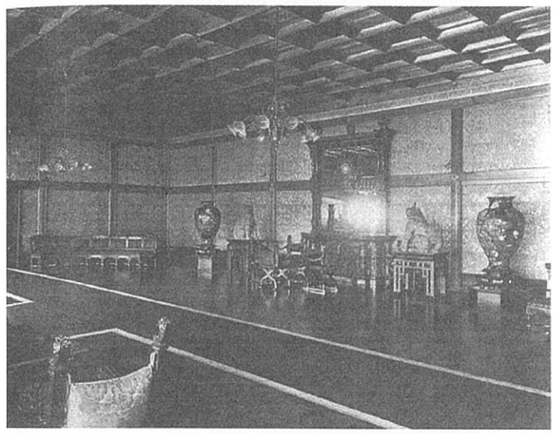

図 7　実際の写真

まず、木子文庫所蔵の計画図面においては実際の写真および片山家資料内の図面には見られない扉や開口部があり、設計変更過程で装飾品配置等のために壁量を増やしたと考えられる。また、木子文庫所蔵の図面では、入口正面は開戸となっているが、片山家資料内の図面と実際の写真ではマントルピースとなっている。よって、マントルピースは明治18年以降に設置が計画されたと考えられる。また、この設計変更によってより内部空間が洋風に近づいている。また、木子文庫所蔵図面の開口部に「クシ形窓ガラスセウジ2」の指示があり、この計画段階では和風意匠が強いことが分かる。

片山家資料内の図面と実際の写真とを比較すると、まずカーテン飾りが実際には採用されていなことが分かった。そして、片山家資料内図面ではマントルピース両脇の燭台であったものが実際の写真では狛犬の置物、くわえて壺が置かれている。さらに、写真には計画案には無い釘隠しがみられる。また椅子等の家具に関しては、あまり変更点はみられない。また、木子文庫所蔵の図面と片山家内で発見された図面を比較すると扉の位置や開口部の位置などが一致する。このことより、片山家資料の図面は明治18年10月に製図されたものをもとに作成されたものであることが分かった

以上より、明治宮殿表宮殿の入口である明治宮殿御車寄受附之間は多くの設計変更を重ね、近代宮殿としての内部空間と近世以来の儀式の場との併存を目指したと考えられる。そして受附之間は、家具やマントルピースなどで洋風の要素を強め、壁面や置物に関しては和風要素を強めることで、近代化した空間と伝統的な儀礼空間の両立を実現したと思われる。

5.3　近代和風建築への分析

明治宮殿の特徴の一つに高い天井高が皇居造営が近代和風建築の天井高に影響を与えたことは先行研究にて明らかとなっているが、明治宮殿の洋装の空間の演出において、マントルピースによる部分が大きく、マントルピースの上の鏡や明治宮殿表宮殿は基本的に土足の仕様であることも特徴にあげられる。

ここで、マントルピースと入口との位置関係については図8のように形態を分類し、明治宮殿内のマントルピースと入口との位置関係を図面及び写真より分析したものを表2に示す。

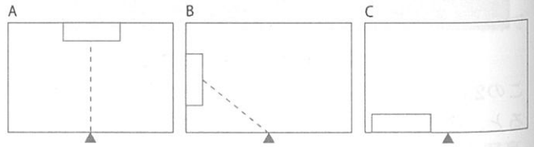

図 8　マントルピースと入口との位置

表2　明治宮殿内のマントルピースの位置

部屋名	形態
北之間	A,B
内謁見所	B
婦人之間	B
女官面謁所	B
化粧之間	B
西一之間	B
西二之間	A,B
受附之間	B
右廂	C
左廂	C
東二之間	A,B
東一之間	B
南溜之間	B
北溜之間	B

明治宮殿のマントルピースの特徴は、入口との位置関係はBの形態をとるものが多く、マントルピースの上には大きな玻璃鏡が備え付けてある。

日本の伝統的な鏡は移動可能な鏡台などであり、鏡を壁面に備え付けるというのは洋風な空間の設えとして代表的なものであると考られる。よって、マントルピースと玻璃鏡の装飾は、洋装の空間の演出をより高めている重要な要素の一つであると言える。

そして、近代和風建築報告書より全国の近代和風建築の中のマントルピースがある事例を収集し、さらにその事例を、入口とマントルピースとの位置関係、鏡の有無と装飾、そして下足・上足の3点に焦点を当て、建設年代順にリスト化した。

表3　近代和風建築事例リスト（一部）

建築年	建築物名	設計者	所在地	形態	鏡	装飾の有無	下足・上足
明治23年(1890)	旧石川県警察本部長公舎(金沢市立美術工芸大学研修棟)	不明	石川	B	無		上足
明治24年(1891)(洋館)	諸戸家住宅	洋館：？　洋室：実施設計　星野則保	三重	B	無	飾棚	上足
明治25年(1829)頃、昭和2年(1927)移築	啓明学園北泉寮(旧三井家別荘)	不明	東京	A	無		上足
明治25年(1892)	津田家住宅	大工　黒田	大阪	A	無	上部に絵画、飾棚	上足
明治中期	榛葉家住宅	不明	静岡	C	無		上足
明治30年(1897)	旧笹野家住宅(懐石白梅)	不明	三重	A	無	飾棚	上足
明治34年(1901)	二宮家住宅(旧宇都宮家住宅)	不明	愛媛	－	無		上足
明治35年(1902)	摂津製油株式会社事務所	不明	大阪	B,C	無	置物、写真、絵画	上足
明治39年(1906)	立正佼成会小樽教会(旧遠藤又兵衛家住宅)	不明	北海道	B	無	置物	上足
明治39年(1906)頃	高取紀子家住宅	不明	佐賀	A	無	飾棚	上足
明治42年(1909)	旧鴻池組本店・本宅	久保田小三郎？	大阪	A	有	飾棚	上足
明治42年(1909)	蕙山苑	不明	北海道	A	無	置物	上足
明治44年(1911)竣工	瑞泉閣	不明	北海道	A	有		上足
明治末期	岡家住宅	不明	大阪	A	不明	飾棚	下足
明治～大正	(財)豊門会館	不明	静岡	C	有		上足
大正2年(1913)：本館	夕張鹿鳴館(旧北海道炭礦汽船(株)鹿ノ谷倶楽部)	不明	北海道	B	無		上足
大正2年(1913)	旧伊庭家	設計ヴォーリズ	滋賀	B	無	置物	上足
大正2年(1913)(伝聞)	吉田希夫家	設計：ヴォーリズ設計事務所	滋賀	C	不明		上足
大正2年頃(1913)	旧諸戸家住宅(六華苑)	ジョサイア・コンドル	三重	B,C	有		上足
大正3年(1914)	山田家住宅	不明	長崎	C	有	置物	上足

このリストを分析すると、マントルピースと入口との位置関係は明治時代はAの形態を散るものが多かったが、大正に入り、A が減りBやCの形態を取るものが増えている。

鏡の有無に関して分析すると、鏡が備え付けてあるものはあまり多くない。これは、鏡の重量や費用の問題あり、一般市民の邸宅に積極的に取り入れづらかったと思われる。また、鏡がある事例の建築年代を見ると、明治42年となっていて、明治末期からマントルピースの装飾として取り入れられるようになったと考えられる。鏡のない事例には装飾として絵画などが用いられている例が多い。これは、鏡を採り入れられず絵画などで代用したと思われる。マントルピースが明治宮殿造営によって暖爐としての暖房機能だけではなく装飾としての意味合いが強くなったといえる。

下足・上足に関しては、明治宮殿の表宮殿は基本的に下足であるのだが、事例のほとんどは上足であった。これは事例のほとんどが住宅であり、下足の生活ではなかったことが要因と思われる。また、下足である事例はほぼサンルームが隣接している応接室であった。これは簡単に外と行き来できるように設計されたためと思われる。

以上より、皇居造営が国民に影響し始めたのは明治末期からと考えられる。これは明治宮殿の内部空間の構成や洋風の設えがどのようになされたか、ということが国民に知られるのに明治宮殿の竣工した明治21年から約20年以上かかったためであると思われる。さらに、皇居造営が近代和風建築の内部空間に大きな影響を与えたことが明らかとなった。

6.　総括

今回の図面資料を分析することで、内部の設計に関しても幾度も設計変更を重ねていることが判明した。そのなかで明治宮殿をどのような空間にしていくかということで片山をはじめ内匠寮の技師たちが様々な紆余曲折を経たと考えられる。さらに、マントルピースは設計変更の途中で採用されていることが分かった。

また、皇居造営による近代和風建築への影響に関しては、洋装空間の演出の中の重要な要素のマントルピースが近代和風建築の内部空間に多大な影響を与えていることが判明した。

参考文献

1)小野木重勝　1979　「日本の建築[明治大正昭和]2様式の礎」三省堂
2) 藤森照信　1993　「日本の近代建築(上　幕末・明治篇)」岩波新書
3)鈴木博之監修　2006　「皇室建築－内匠寮の人と作品」建築画報社
4)宮内庁三の丸尚蔵館 編　2011　「幻の室内装飾:明治宮殿の再現を試みる」　宮内庁
5)山崎鯛介　2004 「明治宮殿の造営過程に見る木造和風の表向き建物の系譜とその意匠的特徴」 日本建築学会